

1 加古川はボーダーの地域

テーマを「官兵衛、そして加古川」としました。

加古川は畿内、それとも畿外？

直接に都の勢力が及ぶ範囲を畿内といたしました。

播磨は畿内の摂津に接しているのですが、畿内ではありません。

以下は、蛇足です。「須磨」の地名には、どこか心地よい響きがあります。

夢を壊すようですが、本来の意味は「角（すみ）」の意味です。播磨では、角（すみ）を「すま」と発音します。須磨は、まさに畿内の「すま」に位置していました。



官兵衛の頃は、須磨から加古川あたりは、まさに近畿地方と中国地方との「すま」（ボーダー）の地域でした。

この位置にある地域は、常に緊張した政治的状況にさらされていました。自分を守るためには、湧き上がるエネルギーを必要としました。

加古川地方は、古代より都（京都・奈良）の勢力と結びつきの強い地域でありながら、中国地方の勢力と絶えず対峙する最前線に位置していました。

都にとって加古川地方は、自らの安全を守るための最前線の役割を持っていました。

一方、加古川地方の有力者は、たえず強い者との結びつきを持っておかなければ、押しつぶされてしまいます。

戦国時代も終わりの頃、信長は勢力を広げるために、この地方へ侵入してきました。当然、中国地方を支配していた毛利の勢力と加古川地方でぶつかることになります。

加古川地方の有力者は毛利方につくか、信長方につくかの選択を迫られました。

「官兵衛、そして加古川」は、この難しい時代を生きぬいた軍師・官兵衛の物語です。

*写真：加古川の流れあたりがボーダーの地域となった。